研究の栞

日本古建築研究の栞（第五回）

工學博士　天沼俊一

第九　虹梁

虹梁とは柱と柱との間に架渡した材をいふ。普通は少し起(ムク)つてゐるが水平の場合もある。其位置によつていろ〳〵の名がついてゐる。例へば妻にあるのは妻虹梁、內部にあるのは內虹梁といふが分類するなら

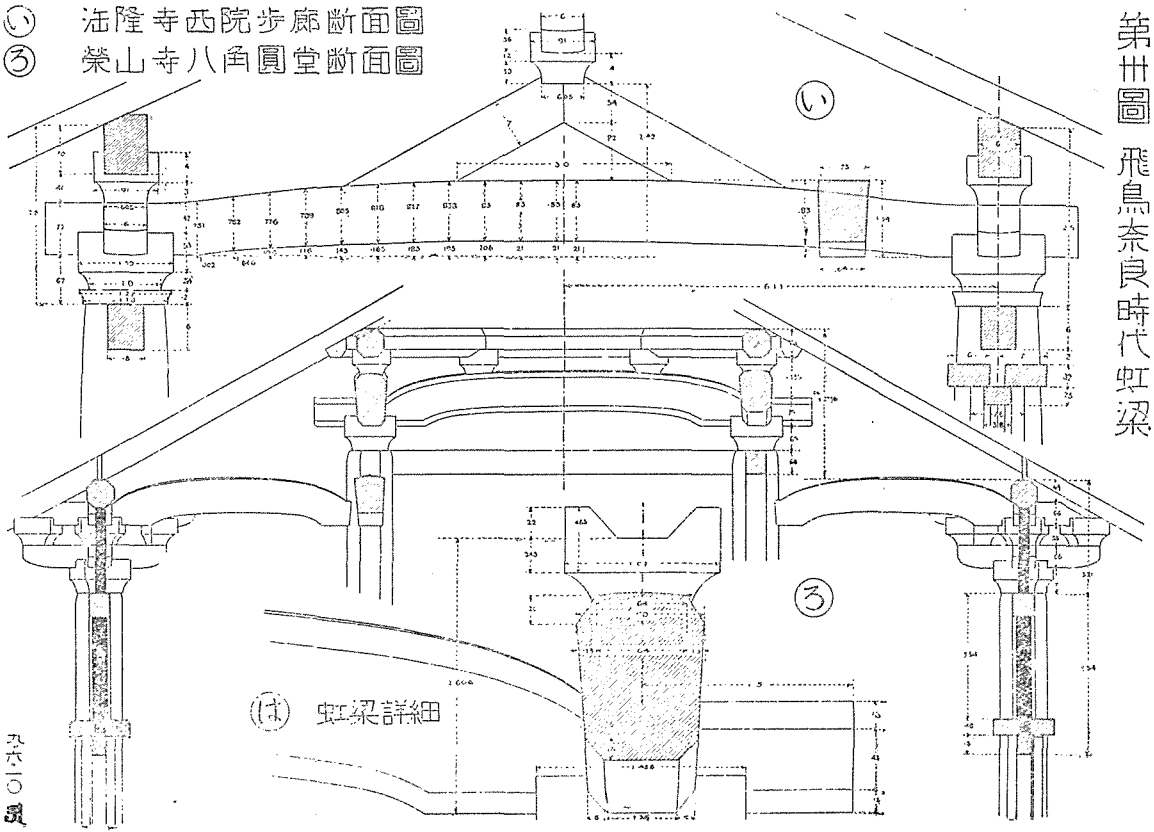
(一)大虹梁。(二)二重虹梁。(三)繫虹梁。(四)海老虹梁

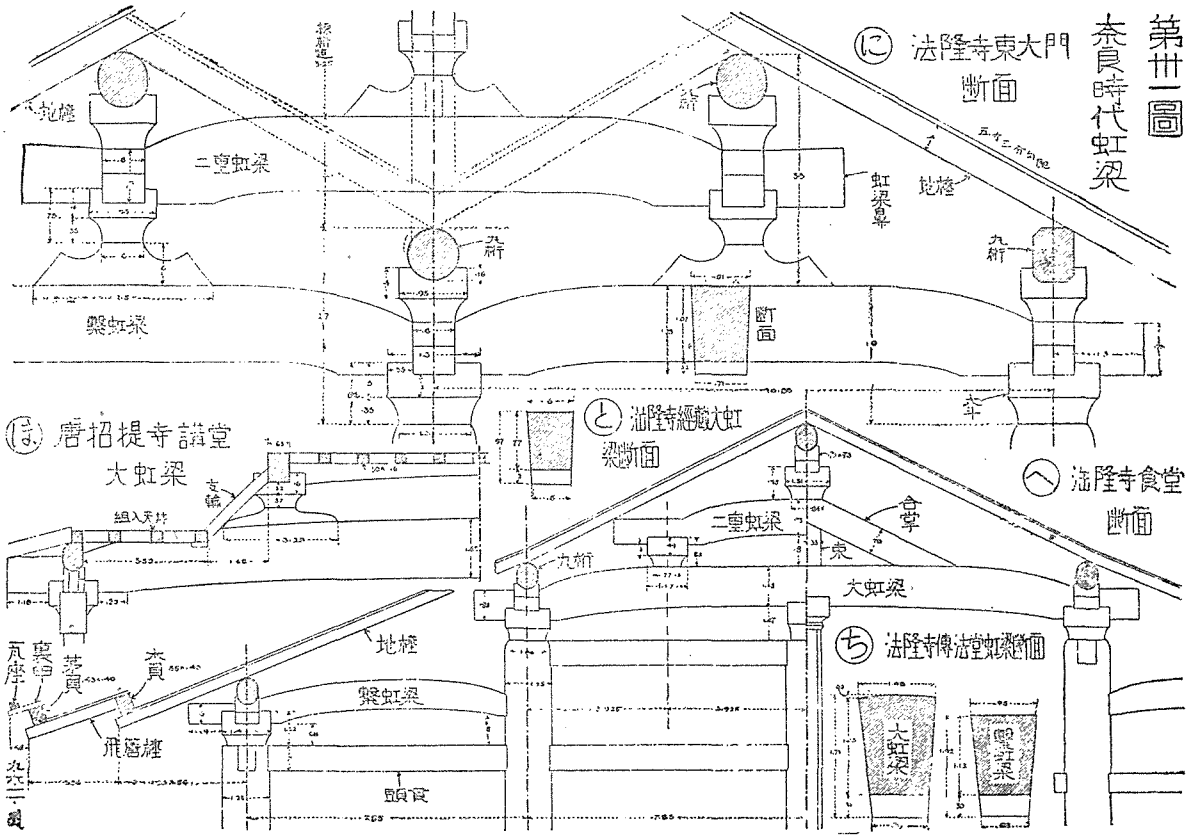
とするのが都合がいゝと思ふ。例により飛鳥時代から始める。

現在飛鳥時代に屬せる建造物の內、法隆寺西院歩廊にのみ原始的虹梁がある。歩廊は巾柱眞々(中心から中心迄をかくいふ)現今の曲尺で十二尺二寸二分あり、梁は中央で二寸一分(同じく今の曲尺にて測る)起(ムク)つてゐる。斷面は上巾七寸五分、下巾六寸四分、卽ち上巾が一寸一分廣い(尺度同上。三十圖の㋺第)。此時代には隨分澤山の寺が建てられたのだから、其內にはもつと立派な虹梁があつたかも知れないが、遺物がない以上有無は斷言出來ない。併し私の想像ではさう變つたものはなく、天張此歩廊式の簡單なのであつたらうと思ふ。

奈良時代に入ると、前期の建築では藥師寺東塔初重裳層に繫虹梁があるが、裳層は（從て虹梁も同斷）塔を現位置へ移した時補加したものといふ說が正しいと思ふから此は見合せとして、後期になると明らかなのが澤山にある。現今此時代の遺物で大さと裝飾とに於いて第一流である唐招提寺金堂內陣大虹梁には立派な繪がかいてあつて、今では大分剝落してゐるが、夫れでも唐草や天人等は或る程度迄復原する事が出來る位に殘つてゐる。第三十圖ろ・はは第三十一圖に・ほ・へ・と・ち・は何れも此時代の實例である。大體に就ていふと前時代より全體として工合よく起り、恰好も大によくなつた。但し斷面は上が廣く下が狹く餘り變りはない。ろは現存の圓堂中異彩を放てる大和五條榮山寺八角圓堂の斷面の一部で、虹梁の形を見るのが目的でかいたもの、此建物は側柱は八本だが內陣柱は四本きりで、其四本の柱上大斗には、丁度其上で直角に交叉せる四本の大面取大虹梁を架し（圖の右柱上は此大虹梁を中央にて、左は交叉點に近い所で切面した面を現してある。だから左右で斷面の形が少し異つてゐる）、其上に正八角形の各角點に相當する所に斗をおいて、又其上に斷面殆んど正八角形に近い程大きな面取の桁が乘せてある。見える所ならこれ程念入にするのは當然であるが、大天蓋で隱されて了ひまるで下から見えないのに、斯樣な意匠を凝らしてあるのは今の頭で考へると無駄の樣だが、如何なる所も苟もしないといふ昔の建築家の要意の程が偲ばれる。其虹梁の詳細ははを見れば分る。此面も上隅の方は下隅のに比して巾が廣い。斯樣な小さい所迄周到の注意が拂つてあるのは全く敬服する。虹梁に面をとるのは平安時代以後は珍らしくないが、此時代では此が私の知つてゐる面取虹梁の唯一の例。夫れから繫虹梁の斷面は左方內陣柱の上方に近く示してある。以上二種は上端に少し膨みがある。此等は立面斷面の兩圖に現しておいた。

第卅圖　飛鳥奈良時代虹梁



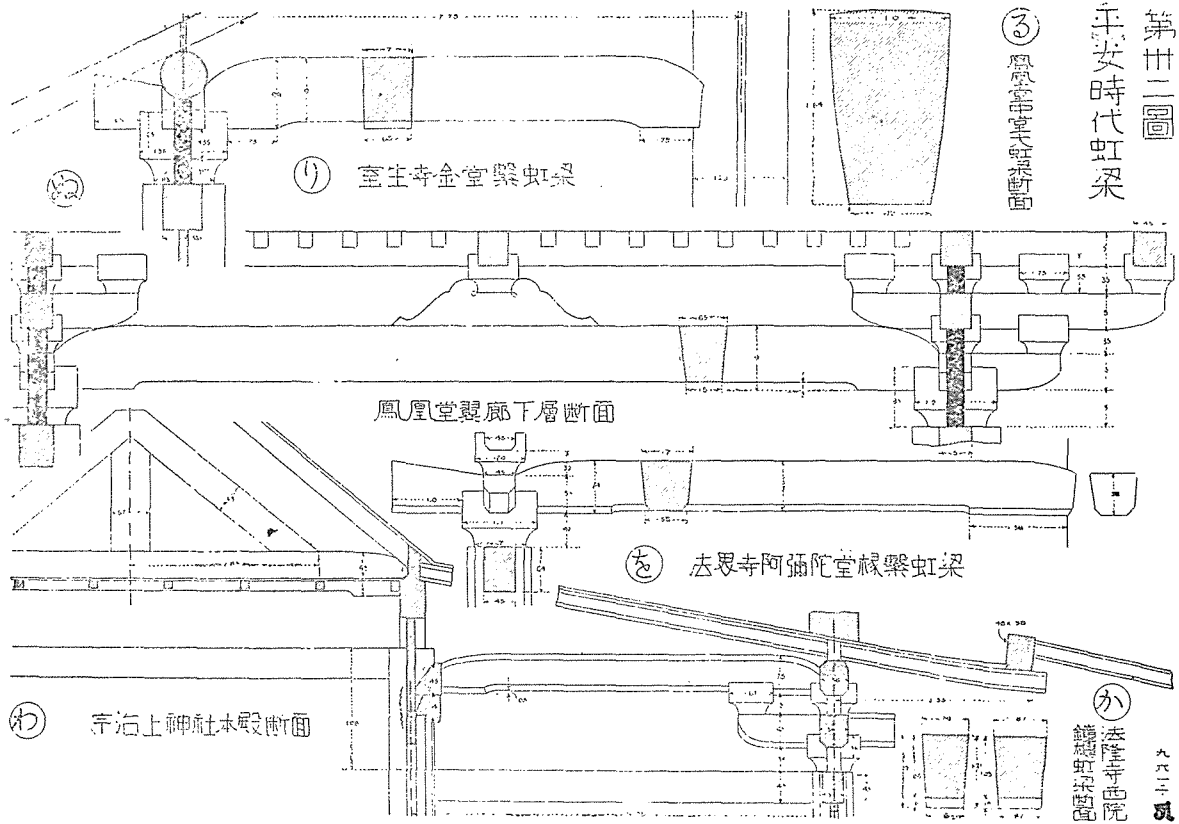

(に) 法隆寺東大門断面
(へ) 法隆寺食堂断面
(と) 法隆寺經藏大虹梁断面
(ち) 法隆寺傳法堂虹梁断面
(ほ) 唐招提寺講堂大虹梁
二重虹梁
盤虹梁
地棧
九桁
虹梁鼻
断面
大虹梁
組入天井
支輪
瓦座
裏甲
茅負
木負
飛檐棧
頭貫
合掌
束

第廿一圖 奈良時代虹梁

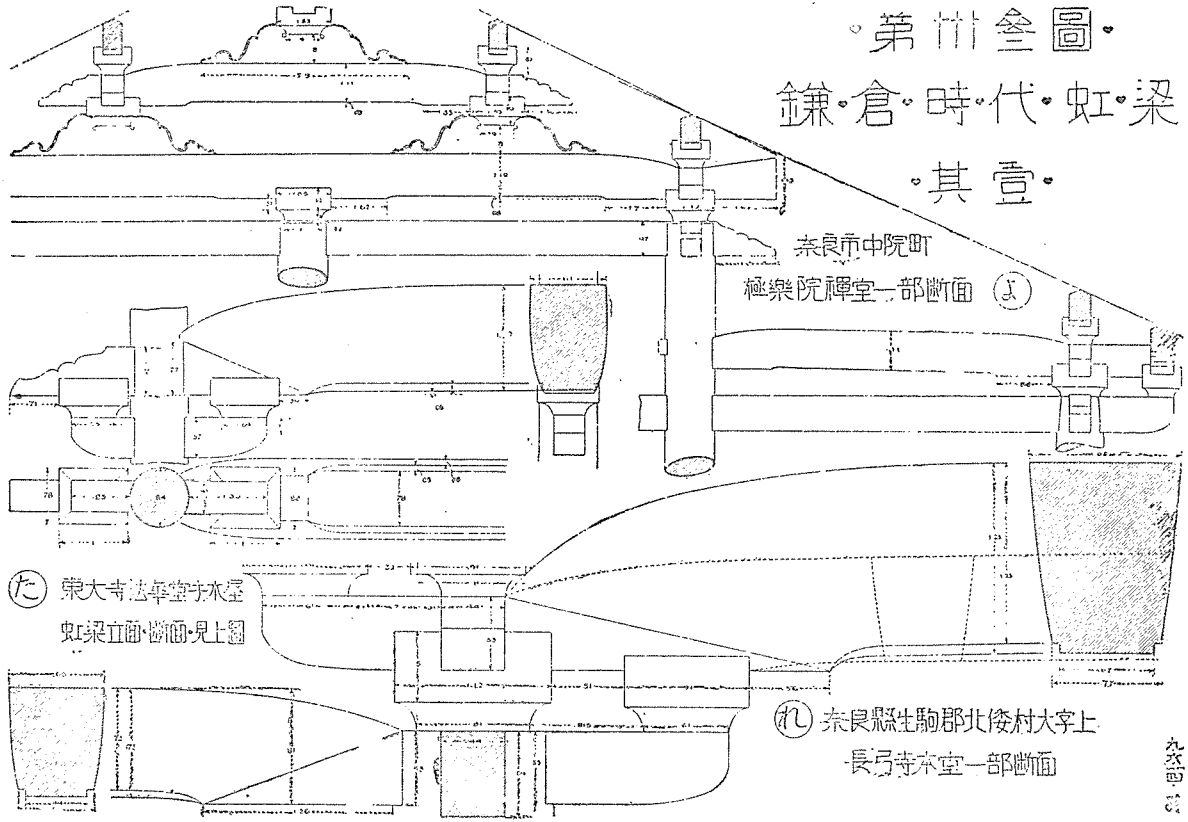
㋺・㋩・㋥等は此時代の虹梁の形が分ると同時に、最も普通に行はれた構架式が分るから掲げたのである。㋺の法隆寺東大門は三間一戸單層八脚門だから、側面からは柱が三本見える。其各柱頭にある大斗に繫虹梁を架渡し、上端中央に夫れ〳〵蟇股を置き、蟇股から蟇股へ二重虹梁を架し、其上に復た同じ型の蟇股がある。同時代の東大寺轉害門（佐保路門）も同斷である。㋩も柱間に大虹梁、其上二所に蟇股、其上に二重虹梁、其上端中央に同じ蟇股があつたのである。これは丁度㋺の大斗間の二本の繫虹梁が、中間に柱がないため一本の大虹梁になつたのである。㋥に示した法隆寺食堂の內部大虹梁上は、同寺步廊や奈良市新藥師本堂の樣に合掌組化粧屋根裏だが、兩妻は前の二例の樣に大虹梁・二重虹梁になつてゐる。たゞ其上端に蟇股の代りに斗が用ひてある丈けの違ひである。此は㋺と同じく中央に柱があるが、夫れでも㋩のやうに一本の大虹梁にしてある。さうしなければ側面の柱は五本だし、兩端の柱との連絡をとるため繫虹梁を用ひた關係上、妻の外觀に大影響があるからである。圖の中心線の右方に面取の角柱と擬皿斗附大斗が半分見えてゐるのは、鎌倉時代に修繕した時のもので當初から在るのではない。細部の樣式の變遷を知ると圖の上でも斯樣な形の斗や柱は奈良時代になかつたから、恐らく後に入れたのだらうといふ見當がつくから、實地を觀れば尙よく分る筈である。

以上の三例で分る通り、柱間に虹梁を架し、其上に厚さの割にせいの低い蟇股（又は斗）を二つおき更に其上に二重虹梁を架し、復其上に前と同種の蟇股（又は斗）をおき、此等で丸桁・棟桁等を支持してゐるのが、此時代に最も普通なのである。以下勿論各時代に此式はある。㋭・㋬は法隆寺經藏及び傳法堂虹梁の斷面で、何れも同じ樣な形だが、

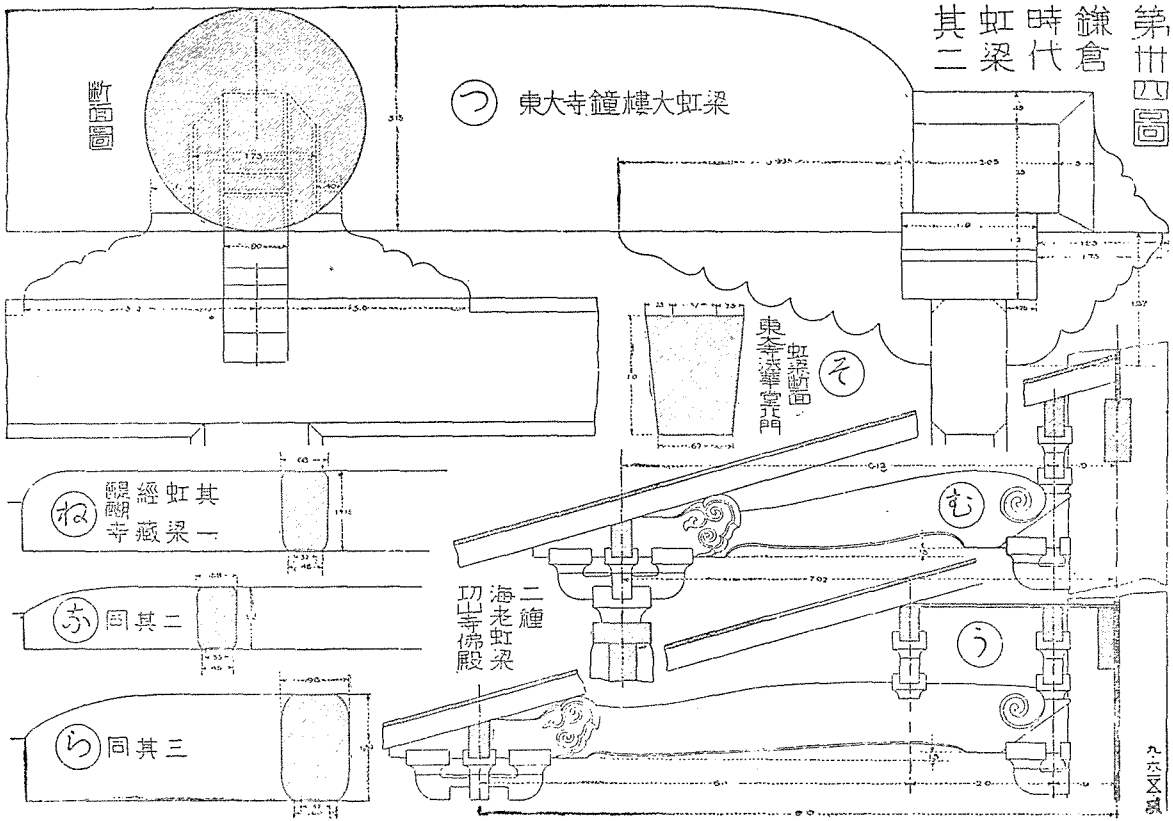
第卅二圖　平安時代虹梁


る　鳳凰堂虹梁斷面
り　宝生寺金堂繋虹梁
鳳凰堂翼廊下層斷面
を　法界寺阿彌陀堂縁繋虹梁
か　法隆寺西院鐘楼虹梁斷面
わ　宇治上神社本殿斷面

第卅參圖　鎌倉時代虹梁　其壹



第卅四圖　鎌倉時代虹梁其二



㋒は上端に㋓・㋕と同樣膨みがある。

此時代の虹梁の樣式を分り易い樣にかくと

(一)起(ムク)りあり。(二)下端の刳りは比較的著明なり。(三)斷面は常に上巾廣し。(四)稀に面取のものあり(五)鼻は水平に若干突出せり。

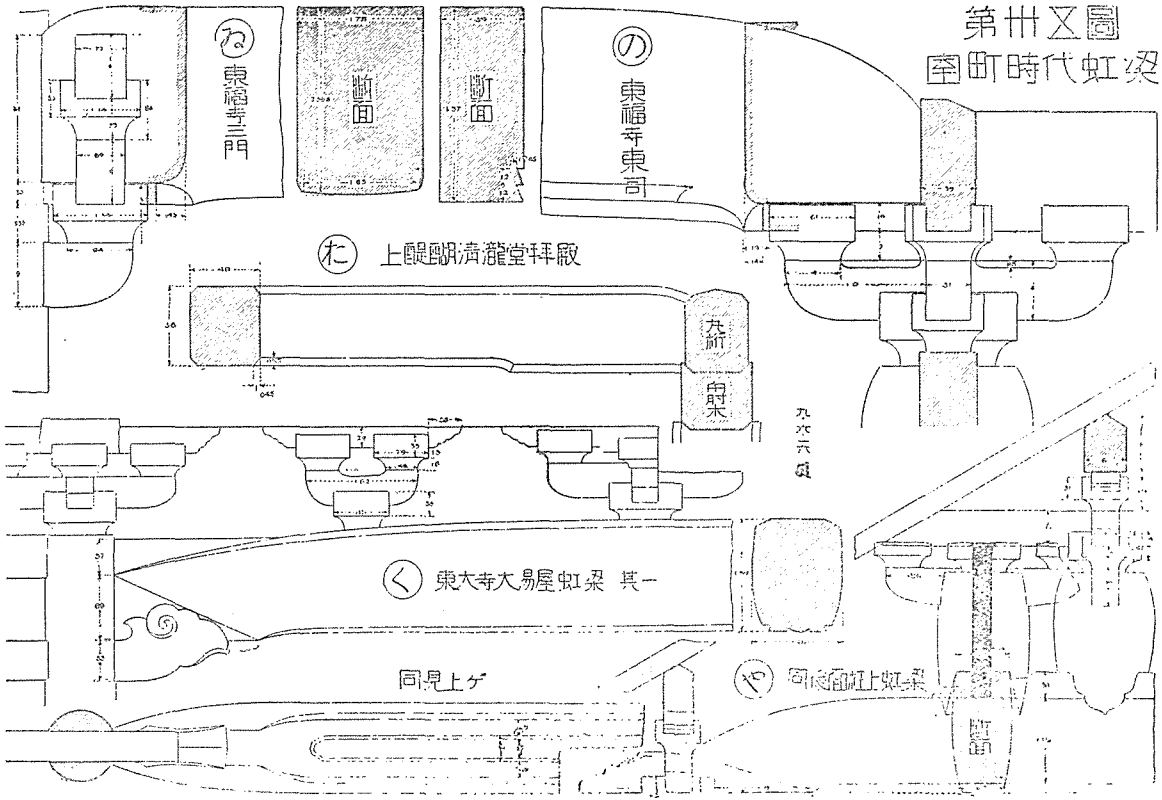
先づ此位なもの。

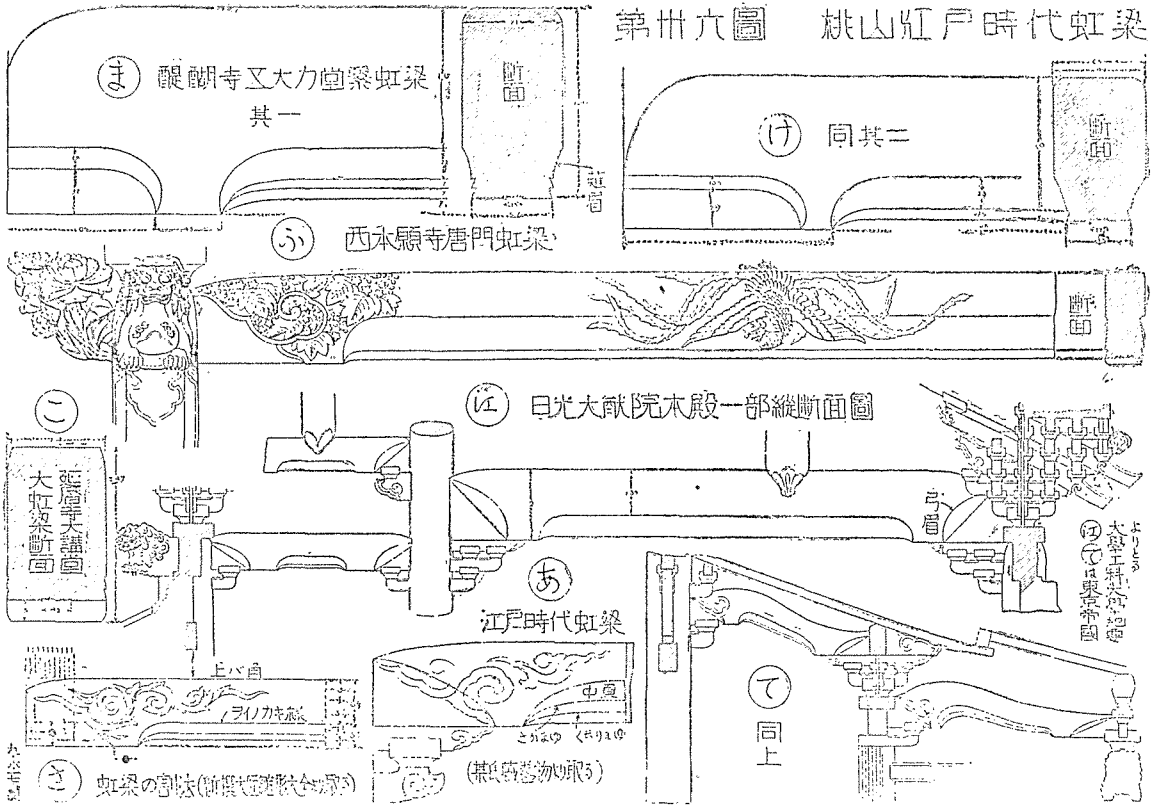
平安時代前期の實例としては、第三十二圖㋑に例の室生寺金堂の繫虹梁がある。奈良後期のと比べると、肩の圓味が增し、鼻上端の傾斜が大分急である。次に後期では鳳凰堂翼廊のが㋚にあるがたゞ少し長い丈けで形は㋑によく似てゐる。同中堂の大虹梁は今圖の持合せもなし、全體を實測もしかねたので、遺憾だが斷面圖丈けにしておいた㋛の法隆寺西院鐘樓の夫れの斷面圖等から分るが此時代の虹梁斷面は前時代と變りなく、上端は水平なのと少し膨んだのとある。夫れから㋟の樣に下隅に丈け面を取つたのと、㋠の樣に上下隅共面取のとある。要するに前時代と大差がない。

次の鎌倉時代は「天竺樣」「から樣」等が入つて來たゝめ大分異つた形が出來だした。遺物も豐富だから第三十三・第三十四圖に十二種出しておいた。先づ第三十三圖の㋚から說明をする。極樂院禪堂は此時代の再建だが、其妻は全く奈良時代の式であるのは、第三十一圖と比べて見れば分る。柱上の虹梁は鼻が斜面に切つてある丈けだが、二重目のはグリ〳〵がついてゐるから、木鼻の說明を讀んだ後なら直に時代の見當がつく筈である。㋟は今迄に無かつた形で二つちがつた點がある。其一は側面下方に一種の繰形がついてゐる、此れを普通「眉(マユ)」といふ。眉にもいろ〳〵種類があるが圖のは「缺眉」といふのである。其二は虹梁が柱より太いため、其まゝでは柱へ挿し込む事が出來ないから、兩側面を搾つて細くし、柱へ取附の部分を扁平に削つてある。此の削つた部分を「袖切(ソデギリ)」といふ

卽ち此時代になつて初めて虹梁に「眉」と「袖切」と出來たのである。㋹のも略ぼ㋺と同じだが大分に太い。第三十四圖の㋩は上端の巾が丁度榧二本の外側から外側迄の巾さと一致してゐる。卽ち一枝と榧巾の加に等しい。いやにきまつて面白くないやうだが、新しい時代の所謂木割法の原は此時代から始りかけ、室町桃山を過ぎ江戸になつて遂に完成されたのである。㋠は東大寺鐘樓の大虹梁の一部で斷面は圓い。此下端にも一寸した彫刻があるのだが、此には略してある。實は此圖が無かつたから、遠方に居る知人に賴んで寫して貰つたので、思ふ樣に出來てゐず從て少し物足りないが形が大分變つてゐるから掲げたのである。此建物は內に吊つてある鐘の龍頭の吊金物に刻せる延應二年云々の銘から、建物も略ぼ其時代と認定されてゐる。㋭・㋬・㋥は曩に天竺樣の例に引いた醍醐寺經藏ので、㋭は繫虹梁、㋬は內陣二重虹梁、㋥は同大虹梁で、何れも下端に淺い彫り込みがある。此の彫り込みを「錫杖彫」といふ。又た「油煙形」(第三十七圖㋭參照)ともいふが錫杖彫の方が一般に稱へられてゐる名だ。此等には眉や袖切はないが上下四隅に皆圓味がある、天竺樣の建物だから普通とは變つてゐるのである。㋠に記した東大寺鐘樓だつてあんな變つた建物である。例の播磨淨土寺淨土堂の虹梁も、矢張圓くて太いのが隅で三本集つてゐるの等は中々壯觀である。

㋻・㋼は灣曲した虹梁で、此も此時代に初めて現れたもの、名稱は「海老虹梁」。「蝦虹梁」ともかく勿論形狀から出た名である。餘事だが此等の屬する山口縣長府町功山寺佛殿は、內陣柱前面向て左側の柱の繫虹梁上端に近く、『此堂元應二年卯月五日柱立』と墨書してあるから年代が分る。海老虹梁は昔しは禪宗建築の內陣柱と側柱との連絡に、向拜のある場合には向拜柱と本柱との繫ぎに


第卅又圖
室町時代虹梁
ね 東福寺三門
断面
断面
の 東福寺東司
た 上醍醐清瀧宮拜殿
共紙
向来
く 東大寺大勇屋虹梁 其一
同見上ゲ
や 同長岡紅上虹梁
断面


第卅六圖　桃山江戸時代虹梁
(ま) 醍醐寺五大力堂梁虹梁
其一
(け) 同其二
(ふ) 西本願寺唐門虹梁
(こ)
(え) 日光大猷院本殿一部縦断面圖
(あ) 江戸時代虹梁
(て) 同上
(さ) 虹梁の割法
上パ面
ライノカキ
中央
(桃山時代)

殆んど定まつて用ひられた。鎌倉の圓覺寺舍利殿には好例がある。此虹梁は高さの異なれる相隣れる二つの柱を繋ぐために發明されたもので、其結び付けらるべき點の高さに差があればある丈け灣曲の度をかへるのだから、どの樣な形にでも出來る。故に異つた形はいくらでもある。

つまり鎌倉時代に於いて初めての手法は

(一)鼻繰。(二)眉。(三)袖切。(四)錫杖彫。

で形からは

(一)海老虹梁。(二)圓(ボル)虹梁(實は「斷面圓形虹梁」といふべきであらうが、餘り長過るし語路もよくないから略して圓虹梁としておく)。

が出來たのである。

室町時代では他の細部と同じく大して變つたのはない。たゞ小さい所に少し手入をした位に止る。例へば第三十五圖㋝の樣に眉は二重になり(尤も二重眉は前時代からあるので此時代に初めて出來たのではない)、上の眉は途中で上端の曲線に嘴を作り逆に戻して急にとめたのもある

㋝の見上圖に錫杖彫の形をかいておいた。大概あんな形のものが多い。錫杖彫については尙後に少しく記すつもりである。㋜・㋝に於いては袖切が大分變形してゐるから一寸變つて見えるが、斯樣なのは室町以降には間々ある。其他一々說明は略しておく。

桃山時代のは第三十六圖㋚・㋛・㋜にある。上の二つは慶長十一年の建築である。醍醐寺五大力堂ので、㋚には三重の眉があり、斷面で分る通り「缺眉」二本と一番上は「薙眉(ナキマユ)」が一本とになつてゐる。袖切にも眉がある。そして虹梁の斷面は上下共同じ巾卽ち長方形。㋛は眉が一本少ない丈けで他は㋚と同じ事。㋜も同じだが上の眉巾が割合に廣く二本で殆んどせいの半分に達する位、其上袖切の輪廓も種々の曲線から成り、其線の一部は卷いて先端にたまが出來「木瓜渦(モクガウウヅ)」になつてゐる。中央の鳳凰や兩端の桐は鍍金裝飾金具で、曩に記した木

鼻の獅子や牡丹の透彫も序だからかいておいた。以上の三例共下端に錫杖彫がある。第十二圖（第五卷第二號一四一頁）の㋓に荒見神社向拜虹梁の一部があるが、袖切の所に便化した小さい葉がついてる。かやうな葉を「若葉（ワカバ）」といふ（若葉は此圖の木鼻にもついてゐる）袖切に若葉をつけ出したのは此時代からである。

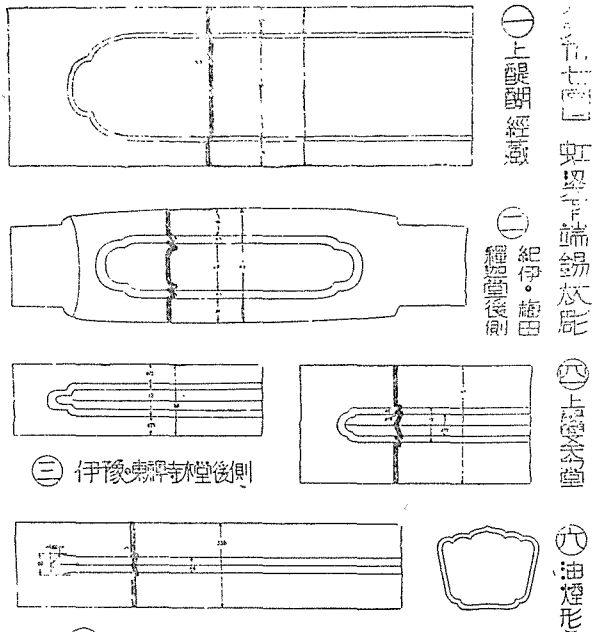
江戸時代。斷面は大概長方形で、時には中央で少し膨んだのもあり昔しのやうに上の開く事はない。㋒は延曆寺大講堂の大虹梁の斷面である。大講堂には澤山虹梁があり、海老虹梁もあるが、何れも袖切の所の斷面――㋕・㋖に於ける如き――は曲線でなく、直角に曲つてゐるから角張つて見え、感じは餘りよくない。㋗は袖切に決（シヤク）つた樣な眉がある、斯樣なのを「弓眉（ユミマユ）」といふが、全く弓の形をしてゐる。荒見神社のにも同じ眉がある。㋕・㋖の袖も猶且弓眉の變形である。何分袖切があゝいふ形だから夫れに添ふた眉も自然あゝなつたのである。㋓は可なり高さの違ひを海老虹梁で樂に繋いでゐる。此形も桃山迄は中々よかつたが江戸になると餘りよくない。甚だしいのになると普通ので間に合ふのに、佝僂の樣に態と彎曲させたのもある。㋐は此時代虹梁の割出し方の一例で次の説明がしてある。

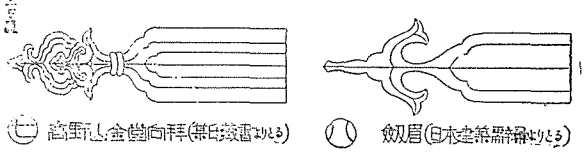
負大さ虹梁七に割壹ぶんかくぢりまゆ又一ぶんがさかまゆ其外二つ割にして大まゆ又中負共申也

下ばのゆるゑん形は四ッ割壹ぶんにも又三分壹にも

此に據ると眉は一番下のがせいの1/7。次がまた1/7。一番の上が2/7。つまり合計4/7となる。下端の錫杖彫の巾は、總巾の1/4又は1/3にするのが恰好だといふ事である。併し締りのない木瓜形や若葉を袖切の所へ彫刻し、右の割合で眉をつけた虹梁は美的價値に於いて大分缺けてゐる。

他の割出し方は㋐にかいてある。此法は高さを十に割り$\frac{1}{10}$を刳り上げ、眉は二重で下のが$\frac{1}{10}$上のが$\frac{1.5}{10}$、袖切の終る所（即ち虹梁下端に達する所）は丁度肘木の木口（コグチ）迄、其點から眉の始まる刳り上げ迄の水





平の部分の長さは$\frac{3.5}{10}$（●印）、虹梁の背の高さは柱の直徑と同一とし巾は七分にとる。そして若葉のみ異常に込み入つてゐる。

以上二種あるが、普通は背の一分又は一分半を刳り上げ、其殘りを七つに割り、あとは第一法によるのである。實地家に訊いてみると皆さう答へる。

夫れから初めの割出し方法の最初に「負大さ云々」「大さゆ又中負共申也」とあり、㋐にも「ヲイノカキ樣」と書入れてある。此「負」といふのは「眉」の字を書き間違つたのが原で遂に一に「負」と呼ぶ樣になつたのかも知れない。今は「負」といふ名は用ひない樣だ。「負」といつても知らない人が多い。

此種の虹梁は第十四圖（第五卷第二號一四四頁）の㈧式の大斗と共に、多く新しい社寺の向拜に用ひてある。此虹梁とあの大斗とが鼻の先きに突き出してゐては甚だ醜惡である。併し昔しの簡單で要領を得たのよりこんなのゝ方が一般に歡迎されてゐるのだから困る。

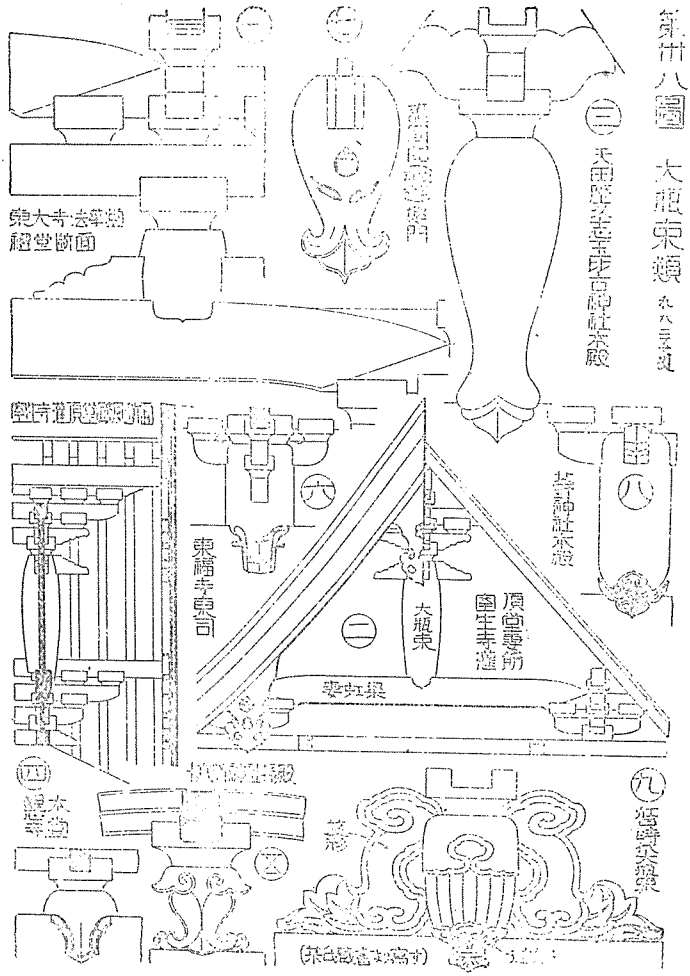
第三十七圖は錫杖彫を蒐めたもの。㈠は錫杖彫の巾が四寸二分で下端の總巾が六寸だから、丁度其比は$\frac{7}{10}$である。序に經藏外陣繫虹梁のは$\frac{7.3}{10}$内陣のは最も狹いが夫れでも$5.5+\frac{}{10}$ある。㈡は中央が膨んでゐる。其最も廣い所で巾四寸三分、錫杖彫も同樣廣い所が二寸四分あるから、總巾に對しては醍醐寺經藏内陣の繫虹梁と同じく$5.5+\frac{}{10}$となる以上二つは鎌倉時代の例。㈢は文明三年の建築たる伊豫國越智郡日吉村大字藏敷所在の東禪寺本堂ので、下端の巾二寸八分に彫の巾一寸三分だから割合は$4.6+\frac{}{10}$。㈣は$\frac{2.6}{10}$で江戸時代の$\frac{1}{4}$に近い。

㈤は殆んど$\frac{1.8}{10}$即ち約$\frac{1}{6}$だから隨分巾の狹い方である。江戸の初期迄はかやうに何れも簡單であつたが、中葉以降㈦の樣なのが流行しだした。「油煙形」といふのは斯樣なのをいふので、格狹間の樣なものゝ名である。此の形は地藏菩薩の持つてゐる錫杖に似てゐる。錫杖彫といふ名はこの種の彫刻から起つたのかも知れない。㈤・㈥の樣に劍の形に似たのを「劍眉」ともいふ。色々な名があつて中々面倒だから錫杖彫に定めておく。

簡單にいふと、鎌倉から江戸の初頃迄は、丁度ゴシック建築の三葉繰形（Trefoil）に似たのが多く夫れから以後は重に込み入つた所謂油煙形になつたのである。比較的新しい建築に於ける三葉及び劍形の實例は夫れ〴〵延曆寺大講堂の海老虹梁及び繫虹梁の下端にある。油煙形のは文政十三年の建築たる花園妙心寺佛殿繫虹梁及び同寺玉鳳院開山堂の後部修補の箇所の虹梁下端に於いて見る事

が出來る。其他にも澤山にある。

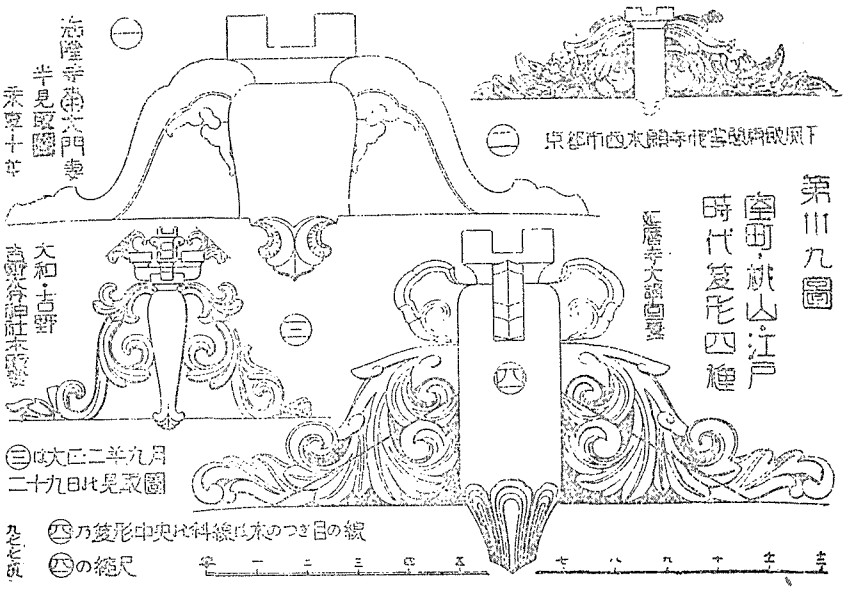
第卅八圖　大瓶束類



第十　大瓶束・変形

大瓶（タイヘイ）束（ヅカ）とは虹梁上に立つてゐる一の束で鎌倉以後に限つてゐる。其形は第三十八・九圖に掲げた樣なもので、普通横斷面は圓形、上に必ず斗があり、下部は虹梁面より出てゐるのを彌縫するため「結綿（ユヒワタ）」（「綿花（ワタバナ）」・「唐花（カラハナ）」等ともいふ）といふものをつけてある。第卅八圖に於て㊀・㊁・㊂・㊃は鎌倉、㊄・㊅・㊆は室町、㊇は桃山、㊈は江戸時代に屬するのである（第三十九圖のは時に変形を説明する記す）。

此種の束も古のは甚だ簡單で、㊀の如きは



虹梁との接續がたゞ一つの茨丈けで、結綿等と名をつける事が出來ない位。(二)も此に亞ぐ單純なものである。一體飛鳥時代から平安後期迄の妻飾りといへば、第三十一圖又は第三十三圖(よ)の樣に二重虹梁墓股式か、又は第三十一圖(ち)・第三十二圖(わ)の樣に扨首束。扨首棹式に限られてゐたが、鎌倉からは大瓶束の輸入により(二)即ち室生寺灌頂堂の樣なのが出來た。此は圖に於いて明らかな通り、妻虹梁の中央に細長なる大瓶束を立て、其上方前と左右とに例のグリ〳〵式の木鼻を出してある。束上の斗に含してある肘木にも下端にグリ〳〵が刻んであるが、此も花肘木の一種である。束とは無關係だが破風板も懸魚も皆同時代で揃つて居て鎌倉の代表的妻の一つであるから、充分了解の出來る樣に叮嚀過るかも知れないが斷面圖をも添へておいた。(三)は結綿の部が少し込み入つて來たがまだ此の位では大した事はない。(四)は明治四十四

年の夏に私が觀心寺へ行つた時に作つた見取圖だから、此通り間違ひなしといふ丈の自信はないが似てはゐるつもりである。胴が大變に短いから此のみ單獨に觀ると形は大してよくない。も一つ第二十九圖の㊂に功山寺佛殿のがある、此は可なり形はいゝ。以上の五種で鎌倉時代大瓶束の概念を得るには澤山であらう。

㊄は室町初期と思つてゐる。奈良縣生駒郡富雄(トミヲ)村大字中(ナカ)に靈山(レウゼン)寺といふ名刹がある。其本堂の向に左裏手の一段高い所に十六所神社と呼ぶ立派な建物があるが、以前其拜殿が靈山寺本堂の左の空地に建つてゐた。此拜殿は至德元年(?)に本殿や攝社を建てゝ後、暫くたつてから建築したものと當時私は推定をしたが、樣式は中央に大きな唐破風のついた割拜殿で、丁度總ての點に於いて官幣大社石上(イソノカミ)神社攝社出雲(イヅモ)建雄(タケヲ)神社拜殿に亞ぐもので容易に得難い建物であつたが惜しい事に維持困難

とあつて、十年許り前に破却して了つたから今は亡い。是非見たければ奈良縣廳に保存してある寫眞と實測圖でがまんするより仕方がない。大分脫線したが壞してしまつたのが洵に惜しいのと、實例として圖を出しておき乍ら、行つてみると影も形もないから分らないと思つたからである。偖て元へ歸つて其大瓶束は大分に裝飾がついて居り、形も今迄のとは大分に異つてゐる。室町になると種々な工風をして飾り出した。㊅は結綿に縱に凹所を二つ計り作つてある。今迄擧げた例は皆下方に近く細くなつてゐたが、此は上から下迄同じ太さで變化に乏しい。上方の斗は圓形である。普通は別に刻んで上に乘せるのだが、此場合には一本でつまり斗繰の所を削りとつたに止るのである（第五卷第二號一四六頁下段參照）。

㊆は和歌浦の有名な紀三井寺樓門ので、束の面に寶珠と眼の樣なものを刻みつけてある。全形は

相當だか彫り物は餘計で、ない方がいゝ。尙ほ他に第三十五圖㊇に東大寺大湯屋の例がある。此も亦室町初期（應永十五年）の建築で、大變よく出來てゐて近畿に於ける大湯屋中の白眉である。束の形は大體㊀によく似てゐる。大湯屋の計劃を囑託された建築家は、先づ以て東大寺内の建物を視察し、法華堂禮堂に於いて鎌倉時代の細部手法に感心した結果、敢て眞似したのではないだらうが感化を受けて似たのではあるまいか。時としては藥師寺（大和西の京）護摩堂妻のゝ如く、裝飾として束の正面中央に縱に第三十七圖㊁の樣な形を彫り込んだのもある下からは餘りよく見えず此も蛇足で餘り感心出來ない。

㊅は桃山時代で官幣中社北野神社本殿内のもの慶長十二年の建築で、結綿が雲の固りから出來てゐるのに、あの樣な薄暗い所にあるのだから、下からではよく分らない。束は圓筒形で肩と尻とが少し窄（ツボ）めてゐる。此等は結綿なんかつけないで、㊀や㊁の樣にしておけばいゝのだが、各部に彫刻を無暗に用ひる樣になつてから、斯樣な所も相當に飾らなければ釣合が取れないとでも思つて、下から見えても見えないでも左樣な事は餘り考へずに込み入つたものを付けたのだらう。西本願寺四脚門のは牡丹の花と葉とをうまく點綴してまとめてある。

江戸から明治へかけて大瓶束の典型は㊈で、全體に浮腫が來て締りなく膨れてゐる。水平斷面も圓でなく隅は撫角をした擺線（ハイセン）（Cycloid）の樣な線の集りから成つてる、此束の兩方に墓股を縱に折半した樣なものがついてゐるのは「笈形（オヒガタ）」といふ名である。或は束の斷面が殆んど圓形であるが爲めに、何れの水平斷面をとつて見ても、皆な外擺線（ノワーハイセン）（Epicycloid）の樣になつたのもある。他に第三十六圖㊉に下部丈け二つかいておいた。二つ共圓筒

形で結綿は割合に簡單である。第三十九圖の四種の「笈形附大瓶束」に就ては次に説明をする。

要するに大體に於いて鎌倉時代のものは、飛鳥時代の柱を短かく切つて逆置した樣な形か、又は細長で波線(Inflection)から成つた輪廓を持つてゐるものかである。室町時代には此二つの外圓筒形のが出來、桃山から結綿が複雜になり、江戸の中葉迄はまだいゝが、末期から膨れ出し今日に及んだのである。

第十一　笈　形

大瓶束の左右に飾りをつけた場合に、其飾りを「笈形(オヒガタ)」といふ。又「大瓶鰭(タイヘイビレ)」「合掌鰭(ガッシャウビレ)」ともいふ。

第三十九圖に於いて、㈠は永享十年上棟をした今の法隆寺南大門妻のもの。目的の笈形は確かに手摺本から縮圖したが、中央の大瓶束はさう精密に測定しなかつたから、半ば見取圖と斷つた次第である。此は正に蟇股折半式で、能く似たのは山城相樂郡相樂(サウラク)村大字相樂(サガナカ)鎭座村社相樂(サウラク)神社本殿の妻にもある。

㈡は飛雲閣初重船入の間の唐破風に用ひられたもの、先づ笈形を唐草化し牡丹化したのだから、少々執拗い感じがする。但し大瓶束は四角な斷面である。大德寺勅使門唐破風下の大瓶束にも、丁度此と同じやうな立派なのがある。第二十五圖の興福寺北圓堂內陣の間斗束兩側の唐草繪が彫刻に變つた樣な形だが、此は全く別物と解釋する方がいゝ樣である。㈢は餘り力がなく不自然な所もあり、恰好も餘りよくない。㈡及び㈢は桃山時代だが、桃山のは皆こんな風だと速斷は出來ない。延曆寺横川(ヨガワ)中堂(慶長九年の建築)の妻のは、肩が張り過ぎてゐて形はまづいが、㈠の樣な至極簡單なのがついてゐる。

江戸時代のでも初期のは中々よろしい。㈣は流石に延曆寺大講堂の丈けあつて、堂々たる洵に美

事なものである。此は大變に大きいから斜に二枚の薄い木を接ぎ合せてある。束の太さは直徑二尺許りあり、笈形の下巾は十二尺位。此位大きく且つ高い所だから、可なり粗末に刻んでも目立ないのに、相當叮嚀親切に仕事がしてある。此等は立派な力强い唐草で、㊀と比べると隨分差がある。所が江戸末から以降第三十八圖㊈の式が流行しだした。大概の所謂雕形本には此樣な繪許り描いてある。不得要領な若葉や、菊の葉と花や、水や雲やどれもこれも思ひ切つた拙劣なもの許り。こんな本若しくはこんな本によつて造つた建物を見て來て、其通り眞似をするから益々まづくなるのは當然である。

＊　＊　＊　＊　＊

大正の建築たる東福寺の庫裏は、不愉快な曲線から成つてゐる唐破風の玄關が正面に無遠慮に飛び出してゐる。其玄關と主屋の虹梁の上に、一つづゝ同じ樣な笈形附太瓶束があるのは氣がきかない。其他海老虹梁・袈束・墓股・木鼻等、總て舊派の流れを汲んで大正墮落式の細部が揃つてゐる。同南禪寺に新築された庫裏及び玄關は、明治の末期から大正の初期へかけて、東都市に於いて隆盛を極めた建築家龜岡末吉氏創意の一種の樣式を、幼稚極る手法を以て模倣したものである。以上の二例は、何れも全體として細部丈けみても私共が我慢の出來る程度を超越してゐるのだから劇しい。兩方の寺へは洵に氣の毒であるが、まづい方の例として至極適當であると思ふ。（大正九年八月十五日稿了）